

# 神戸大学総合ボランティアセンター

SNSで各セクションの活動がわかりやすくなっています  
団体参加もこちらからご連絡ください

総ボラ X



総ボラ Instagram



総ボラ公式 LINE



## <8つのセクション>

### ① 手話サークル「ペんぺん草」



楽しく手話を学びつつ、手話を通じたろう者とのコミュニケーションを大切に活動しています。

### ② とんかちセクション



地域の団体さんと関わりながら、天井川公園の清掃活動や植物の維持管理を行います。

### <総ボラのあゆみ>

1995年	1月17日 阪神・淡路大震災
	5月10日 神戸大学総合ボランティアセンター設立
	・仮設住宅でのボランティアやサロン活動を行う
	・月見山自治体での活動開始(後のとんかちセクション)
	・点訳や障がい者セクションの原型もできる
6月	第1回灘チャレンジ開催
2000年頃	現在の8セクションが揃う
	・生田児童館、八雲児童館、セ・ラ・ヴィ(老人ホーム)など多岐にわたる活動が展開される
2017年	生田川児童館セクション、八雲児童館セクション休止
2024年	生田川児童館での活動再開 9月15日 第30回灘チャレンジ開催

### ③ 住之江児童館セクション



児童館に来館している子どもたちと遊ぶことを通して子どもたちに豊かな経験の機会を提供します。

### ④ 灘地域活動センター



毎週土曜午後にJR灘駅近くの集合住宅でお茶会を開いています。

### ⑤ 障がい者セクション

障がい者と交流したり介護に入ったりしています。活動を通して、障害者が自分の望む地域生活を送るためのお手伝いをします。

\*⑦, ⑧の団体は活動休止中。  
入部者がいれば活動再開します。

### その他地域のニーズに応じた

#### 活動

〈主な取り組みと成果〉

○ほっとはなたばの活動

○六甲ウイメンズハウス(ミモザハウス) 学習支援 and 子ども食堂

総ボラからは7名が協力。人員不足のため、神戸大学国際人間科学部子ども教育学科及び学生震災救援隊から増員して独立した組織を形成して活動中。

○灘区自立支援協議会災害対策部会参加

総ボラから1名が参加。

### ⑥ 灘チャレンジ実行委員会



阪神淡路大震災の復興祭である「灘チャレンジ」を企画運営します。

### ⑦ まーくん☆チーム

#### セクション

朝、障がいの方と散歩を行うというゆるく楽しいセクションです。

### ⑧ 点訳セクション

絵本を点字に訳す活動や点字に関する勉強をします。

# 灘チャレンジ実行委員会

## 1995年6月4日第1回開催

当時、神戸大学学生救援隊所属の中北が委員長となり「復興祭—NADA Challenge—」が開催された。 “復興祭”がメインタイトルで、 “NADA Challenge”はサブタイトルであった。サブタイトルには、灘のまちづくりに、学生が住民と共にチャレンジするという意味が込められている。

### 1995～2001 灘チャレンジ初期

- 1995年6月4日 復興祭—NADA Challenge— 開催  
中北委員長の下、六甲八幡神社（現在駐車場となっている場所）で開催される。約3,000人の来場者を得た。
- 1996年6月 NADA Challenge 開催  
内野委員長の下、1995年と同じ場所で第2回が開催される。この年は、神戸大学総合ボランティアセンターとの共催という形で開催される。  
現在の灘チャレンジ実行委員会は、学生震災救援隊と総合ボランティアセンターの2つの団体に所属する形となっており、1996年のNADA Challengeがその始まりとなっている。
- 1997年6月 NADA Challenge 開催  
過去2年で開催場所としていた六甲八幡神社の場所が駐車場として整備されたことから、会場を都賀川公園に移して開催される。  
この年から助成金を得ることができなくなり、水道筋商店街などから広告協賛をいただくことが始まる。
- 1998年～ 灘チャレンジ 開催  
祭りの名称が“NADA Challenge”から“灘チャレンジ”に変更される。  
98年は大和公園に開催場所を移したが、99年以降は毎年都賀公園で開催されるようになる。

1995年の復興祭—NADA Challenge—から、毎年寸劇が公演される。

づく  
くり  
「人と人とのつながりや  
灘チャレンジ」と  
の  
コミュニティ

- 2008年6月1日 灘チャレンジ2008 開催  
社会問題を題材とした風刺劇の公演が灘チャレンジのメイン企画となってきた。この年は夜間中学を題材とした劇。

### 2008年7月28日 都賀川水難事故

2009年の灘チャレンジ以降、都賀川水難事故の継承活動が展示等の企画で毎年行われるようになる。

- 2016年の灘チャレンジより、消火器を使った消火訓練体験企画を開始
- 2018年の灘チャレンジ2018では、10,000人の来場者を得る。

灘  
「コ  
ロ  
ナ  
禍  
」の  
ジ

- 2019年6月1日 灘チャレンジ2019が雨により中止

- 2020年 都賀川公園での開催を断念し、12月にオンライン上の企画を計画。“オンライン灘チャレンジ”を実施。
- 2021年 都賀川公園での開催を断念し、冊子「なだなんだ」を発行。
- 2022年 4年ぶりに都賀川公園で開催。

### 2019～ 灘チャレンジ

「復興祭」としての灘チャレンジ

### 震災から29年 何を受け継いできたか

私たち灘チャレンジ実行委員会は、阪神・淡路大震災の復興祭として始まつたお祭りである。この第1回の灘チャレンジは、震災直後の1月23日に設立された「神戸大学学生震災救援隊」の1つの活動として実施された。設立当初の震災救援隊は、テント村など公的な救援が届きにくい場所にいる人への支援であったようだ。こういった内容は震災救援隊が独自で発行していた“救援隊通信”的第10号に記載されており、そこで当時の代表が、ともに協力した社会人や活動家への感謝の言葉が記されており、地域の人とのつながりがあったことが読み取れる。灘チャレンジもそういった“地域とのつながり”の中で誕生したお祭りで、学生が主体となって作り上げていくお祭りであるが、実態としては学生と地域の人が5:5の割合で関わっており、地域とともに作り上げるお祭りであった。

2000年代に入って、灘チャレンジが“復興祭”という文字通りの性格だけで継続していくことに疑問を持つようになった。灘チャレンジは1996年の第2回開催から、震災救援隊と神戸大学総合ボランティアセンターの共催という形で運営されてきたが、2001年度の終わりに総合ボランティアセンターが灘チャレンジの取り組みを放棄しようとする動きがあった。結果として現在に至るまで灘チャレンジは総合ボランティアセンターの1つのセクションとして存続しているため、実際に放棄されることにはならなかったが、灘チャレンジの開催理由を考え直すきっかけとなった。そうして灘チャレンジは“復興祭”に加えて、“復興の過程や復興そのものから見えてきた問題を発信する場や、祭りを創る人と来場者との交流、さまざまなものごとに出会うきっかけとしての場”などといった性格が強くなっていた。祭り当日には、問題を発信する場として“寸劇・風刺劇”が継続して公演されたり、地域で活動しているボランティア団体などに模擬店の出店をしてもらっていた。

そして現在、新型コロナウィルスの流行によってこれまで創り上げてきた地域との関わりやOB・OGとの交流がなくなってしまったことで、これまでの灘チャレンジがどのようなことを大事にしてきたかといったことが受け継がれることがなくなってしまった。2022年に4年ぶりに開催された灘チャレンジは“コロナ禍からの復活”を前面に押し出したお祭りで、今年度開催した灘チャレンジ2023は、2010年代の開催規模に回復させることに注力する形となった。

灘チャレンジは震災発生からの経過やその時々の社会情勢に合わせて内容が変化していったが、ここまで29年で一貫していたことは、第1回開催のサブタイトルに込められた「灘のまちづくりに、学生と住民がともにチャレンジする」ということをその時代の学生が意識して祭りを企画・運営してきたことである。



左から灘チャレンジ2008、灘チャレンジ2013、灘チャレンジ2015



灘チャレンジ2023

# 灘地域活動センター

## 設立1997年4月

### 設立のきっかけ・活動内容

阪神淡路大震災の後に避難所などで支援活動を行っていた学生組織が前身となり、1997年に灘地域活動センターが設立され、1999年から現在の活動場所である兵庫県営岩屋北町住宅とHAT神戸灘の浜で活動することとなりました。コロナ禍で一時中断されていた時期もありますが、25年以上にわたってお茶会・戸別訪問活動による住民さんとの交流活動を続けています。



毎週末に二か所の集会所でお茶会を開催し地域の住民さんと交流する活動を主として、そのほかに季節ごとのイベント・レクリエーション企画を行ったり、年賀状の送付を行ったりもしています。



お茶会では、毎回15～25名ほどの住人さんに参加いただいており、飲み物やお菓子を食べながら住民さん同士や学生との会話を楽しんでいただいています。

お茶会に参加されるのは地域のご高齢の方が中心で、足腰を悪くされて外出の機会が減ったり、ご家族と離れて暮らしており支援が得にくい状態にあったりする方に、地域住民同士・あるいは学生との交流・関係性の構築の機会を提供することが活動の主な目的です。



# 神戸大学学生震災救援隊

## 1995年1月23日設立

### 発足当時の救援隊(1995)

神戸大学は生協食堂、農学部、国際文化学部体育館などが避難所になった。大学生協あてに届いた物資を用いて学生が自主的に炊き出しを開始。その後、1月23日に同じ大学生協に避難していた学生を中心に「神戸大学学生震災救援隊」が発足

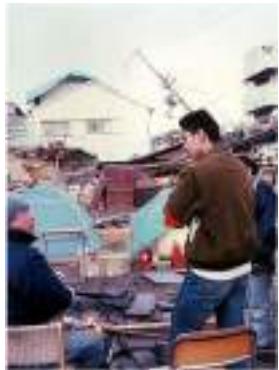


### 地震を跳ね返す耐震構造の人間関係を作る

大規模災害では、通常の行政が可能なサービス提供量をはるかに上回る被災者のニーズが発生する。そのため「自助・共助」が重要となり、それを実現するためには「日常的に地域の人同士間の横のつながり」が必要である。このような横のつながりを実現するために「市民とともに、市民のひとりとして」町に関わろうとする学生が集まっているのが学生震災救援隊

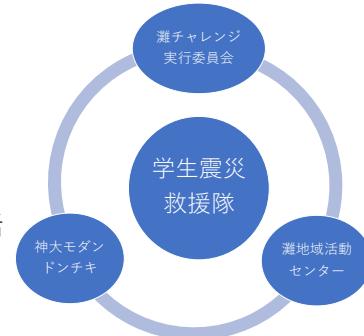


学生震災救援隊の隊員たちは、地域住民の方や避難者の方と協力しながらお風呂運営や炊き出し、テント村パトロール、子供たちの学習支援などのボランティア活動を行った。



### 現在の救援隊(2024)

現在の学生震災救援隊は阪神・淡路大震災からの復興祭である灘チャレンジ、隔週土日でHAT神戸と岩屋でお茶会を開催する灘地域活動センター、全国各地でチンドンの演奏を行う神大モダンチンドンチキ3団体と連携して活動を行っている。学生震災救援隊は主に震災継承イベントの開催、水害や地震の被災地に赴き足湯などのサロン活動を行う。



### 令和6年能登半島地震被災地での支援活動

令和6年1月1日に起きた能登半島地震の被災地である石川県輪島市、七尾市で支援活動を行いました。この活動は現地で活動している被災地NGO協働センターの協力と現地の七尾市中島区の集会所からの支援要請があったため実現したものです。



現地では足湯で現地の方と交流を行い、現地支援のニーズを把握しました。また、被災された住宅で瓦礫などの片付けの手伝いをさせていただきました。

# 神戸大学ボランティアバスプロジェクト

2011年4月30日設立

## 設立のきっかけ

東日本大震災発生直後から

「被災地に何かできることはないか」という多くの学生の声が大学に寄せられたこと  
をきっかけにボランティアバスが派遣され、23名で岩手県大槌町、陸前高田市を訪れました。

### 目的

東日本大震災の被災地に継続的に神戸大学生を送り込み、  
被災者に寄り添う活動を行い、  
被災者の自立を支援し被災地の早期復興を図ること



震災後避難所や仮設住宅で生活されている方々へのケアを中心に実施。



### 設立当初

### 参加者の声

今回参加して感じた事は、継続的な支援の重要性だ。現地の方はよく、「忘れられることが一番怖い」「ボランティアが来てくれるだけで嬉しい」とおっしゃる。  
「私達は忘れていません」このメッセージを届けるために、これからも現地に通い続けるつもりだ。

ほんとに何の変哲も無いところに津波がきて、「この町を特別にしてしまった」  
でもだからこそ、自分が来てこの町が好きになって、僕にとって特別になった。  
僕にとっては何より会いたい人がいるのと、  
ご飯が美味しいのと会いたい仲間が居る場所が陸前高田です。

初めて東北に行きましたが、  
思ったよりも復興が進んでいない  
というのが最初の印象でした。

### 目的

阪神・淡路大震災の被災地域での  
ボランティア活動を通して当該地域  
に貢献する。

また、震災やその教訓について学び、  
学生企画の防災プログラムの実施や  
震災伝承を通して、  
しなやかなまちづくりに寄与する。



将来予測される災害に備えるため、東日本大震  
災の被災者の声を神戸で語り継いでいく。そのた  
めに、語り部の担い手となる学生を育成する。

岩手県大槌町で行われているお祭りに学生を送り  
込み、祭りの盛り上げに寄与する。  
また東北の文化を神戸で広げ、東北に関心を持つ  
学生を増やす。

また、神戸で得られる阪神・淡路大震災の語り部  
活動に関する知見を東北の方々に提供し、  
震災を経験していない者としての語り部のあり方  
を共に模索する。



### 参加者の声

震災についてだけじゃなく震災の前、そして震災が起きてから  
今も続く暮らしについても考えるきっかけがうまれた旅だったと思う。  
私たちがすぐに今の日本の防災意識を変えられるわけではないと思うが、  
考えることをやめてはいけないと強く感じた。



私の地元は絶対に津波が来ないので本当に実感が湧かなかった。ただそんな中で  
当事者意識を持った防災活動をするにはどうすればよいのか、  
一人一人の行動から始まるのだろうが、悩んでまだ答えや解決の糸口が出ていない。

大川小学校で語り部の方が  
経験に血を通わせる事が大切と仰っていて、  
戦争やほかの災害でも報道では  
被害の人数や被害の状況を伝えるだけだが、  
被害にあった人にもそれぞれの人生があることを  
忘れない事が大切だと感じた。

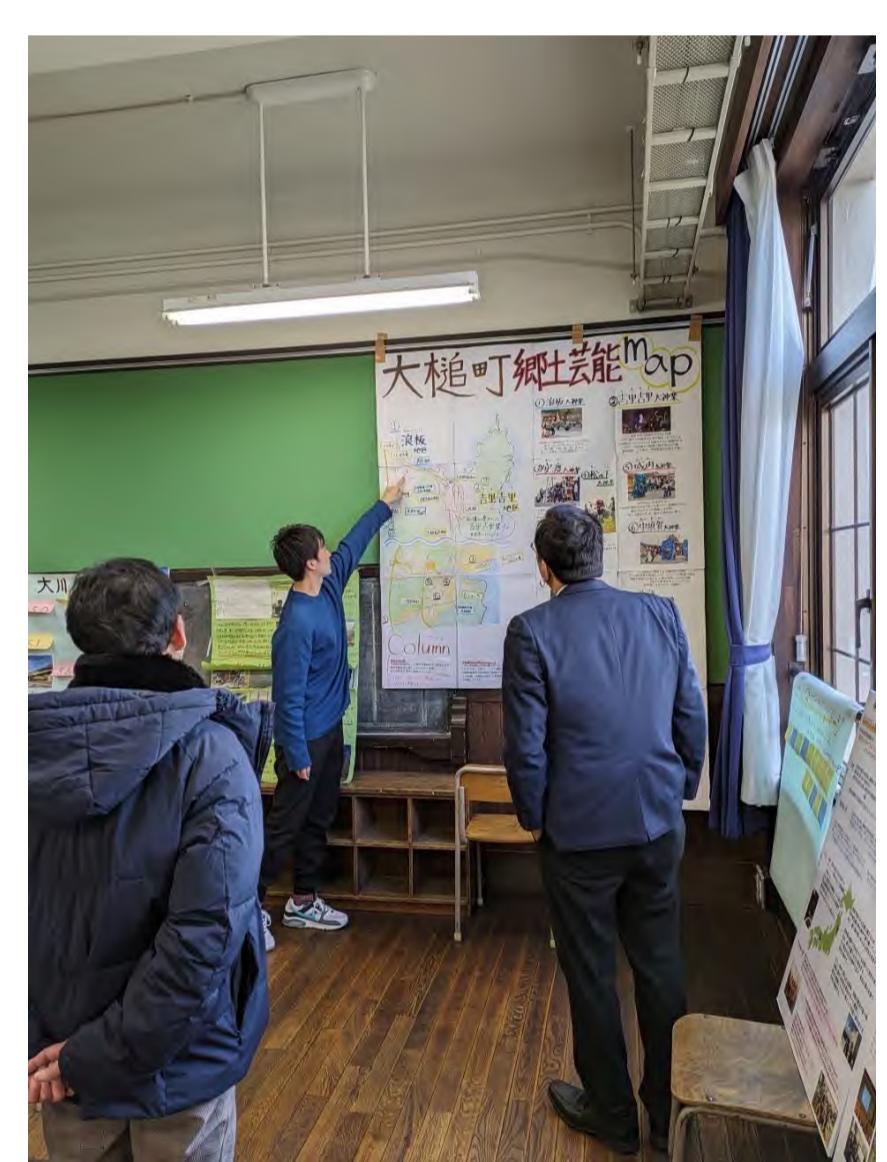


# 震災の語り継ぎ・大学生の交流

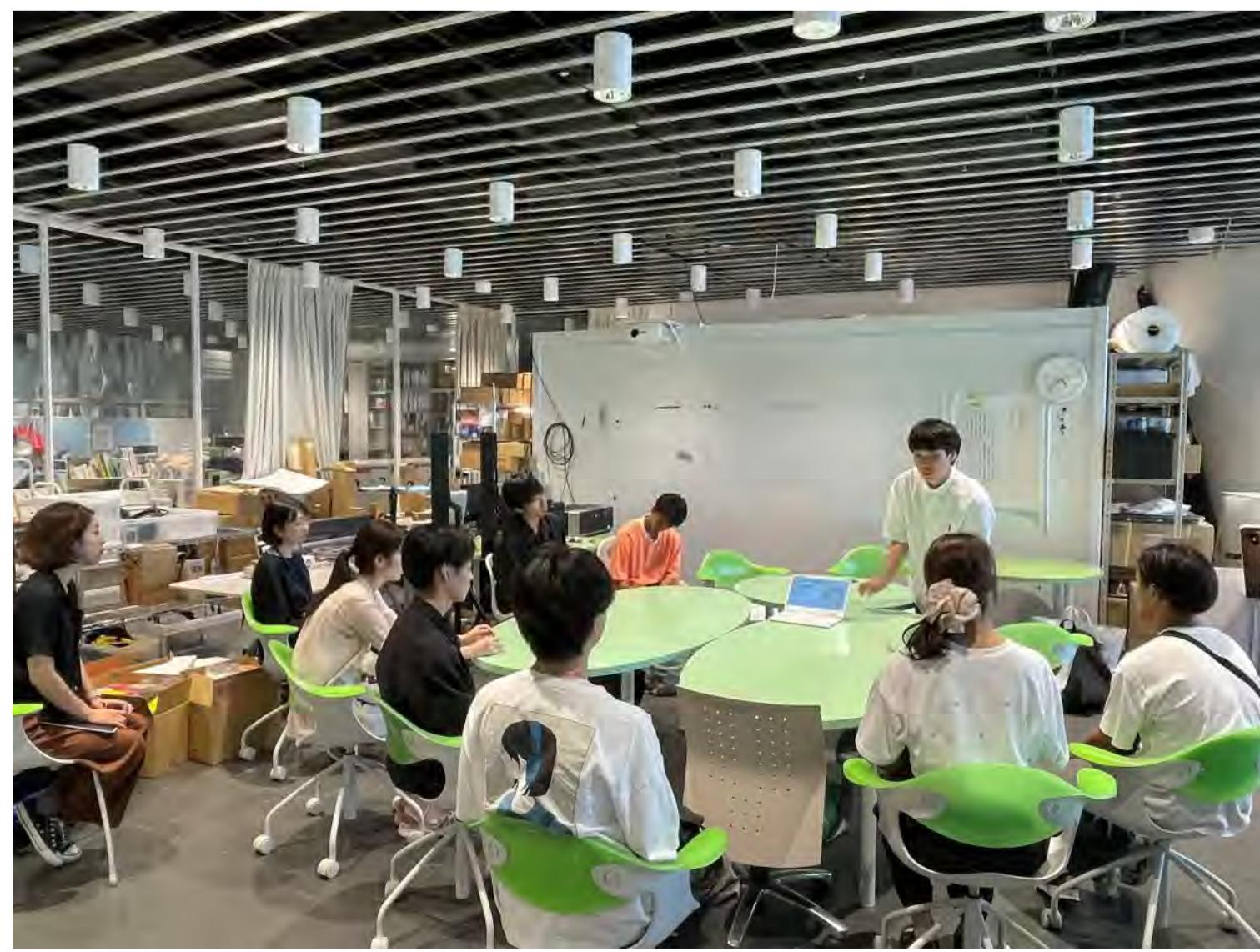
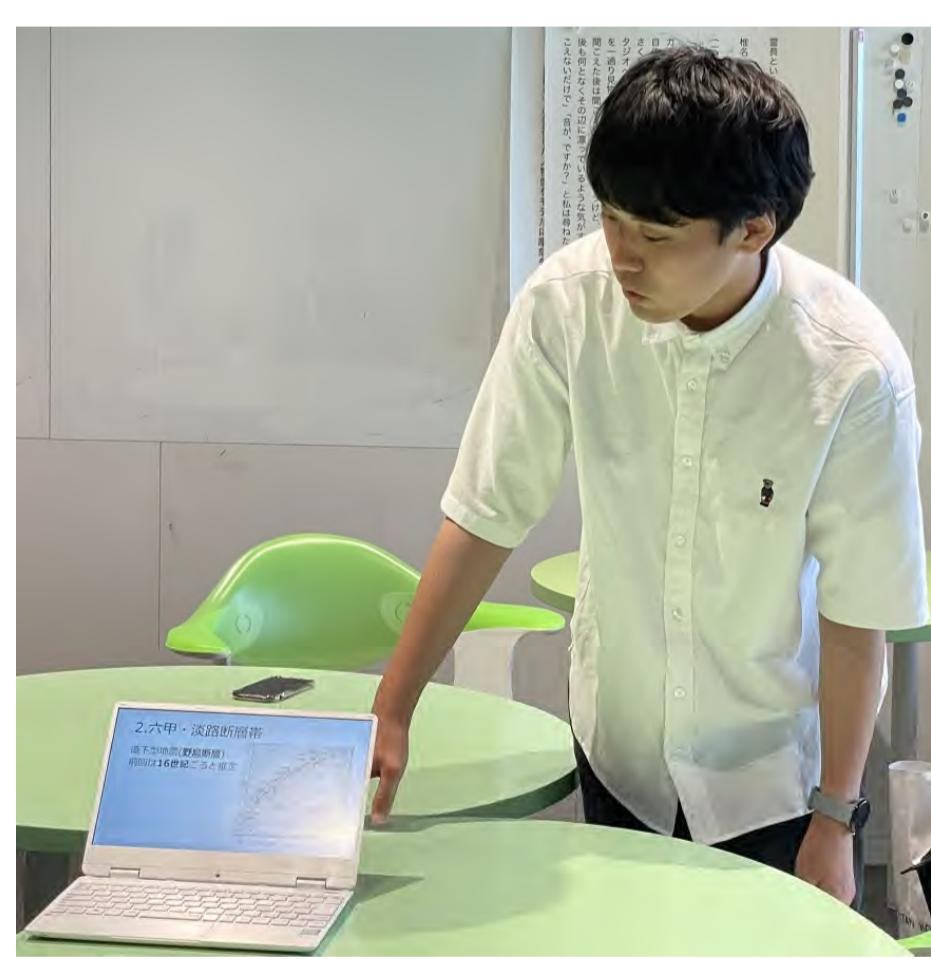
神戸大学ボランティアバスプロジェクトは、東日本大震災、阪神・淡路大震災をはじめとする震災について学んでいます。学んできたことを、自分たちの中で終わらせるのではなく、語り継いでいくことが重要だと考え、語り継ぎ活動を開始しました。同じく語り継ぎ活動を行っている東日本大震災被災地の大学生皆さんと定期的に交流を続けています。

## 阪神・淡路大震災の学び・語り継ぎ

1995年に阪神・淡路大震災が発生し、30年が経過したことでの震災の記憶の継承が課題となっています。簡単に語り継ぐことはできません。震災について様々な方のお話を聞き、自分達でも学びながら、注意深く語り継ぎ活動を行っています。



## 震災の語り継ぎ～東北大学SCRUMとの交流～



東北大学SCRUMの皆さんと、2024年2月から定期的に交流をさせていただいています。初めは宮城県南三陸町の旧大川小学校での語り部を聞かせていただき、女川町でまち歩きを行いました。8月には、宮城県名取市閑上地区で震災遺構をめぐりました。その後、せんだいメディアテーク内に移り、今度は私たちが、阪神・淡路大震災に関する語り部を実施しました。同じ震災伝承を行う仲間だからこそ、苦楽を理解し合い、楽しい時間を過ごすことができました！



# 神戸の活動

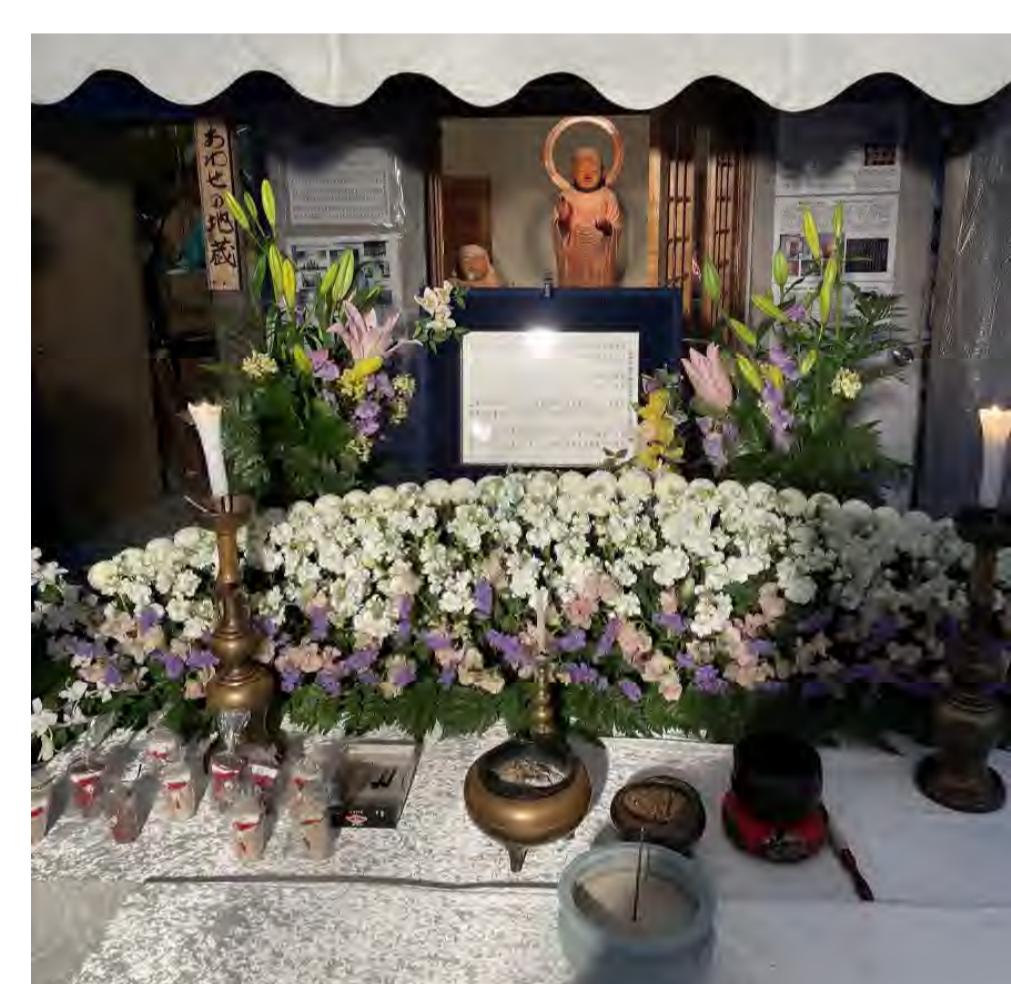
## 神戸大学ボランティアバスプロジェクト

令和4年度に東北地方でのコミュニティ支援に一段落をつけ、私たちは新たな活動の形を模索しました。そして、大学の地元、神戸で阪神・淡路大震災について学び、震災伝承につなげる活動を開始しました。現在では大きく分けて2つの場所で活動をしています。

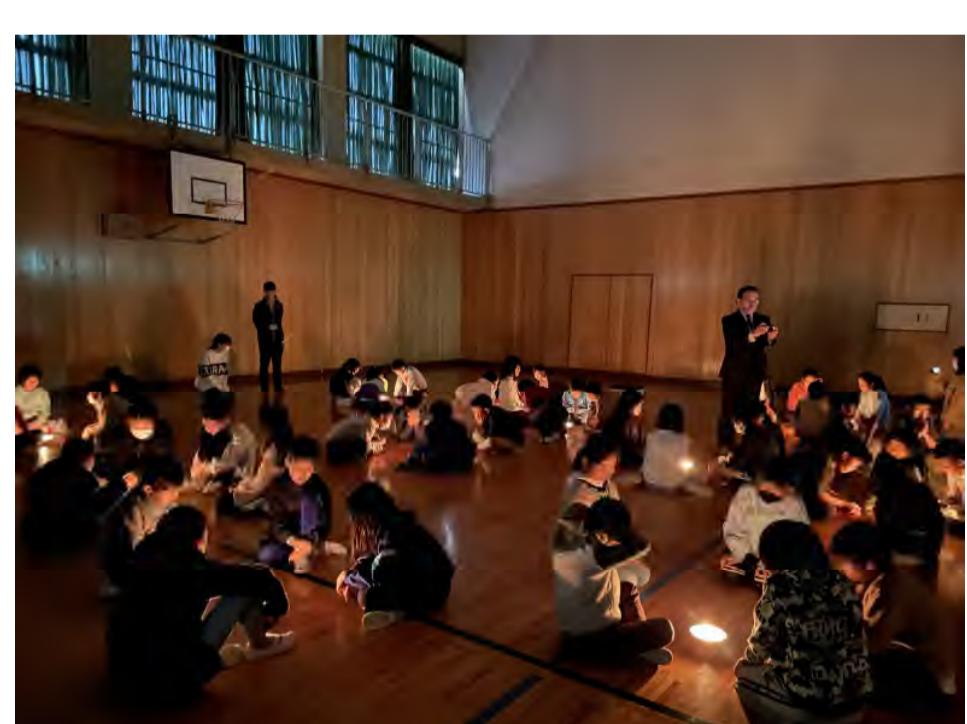
### 神戸市長田区日吉町5丁目 での活動



阪神・淡路大震災では、長田区の日吉町5丁目は家屋の倒壊や火事などによって甚大な被害を受けました。現在、地域コミュニティがとても活発で、様々な行事が行われています。8月地蔵盆、12月餅つき、1月の慰霊祭などを中心に行事のお手伝いをしています。



### 1.17 KOBEに灯りをinながた での活動



長田区では阪神・淡路大震災を慰霊する大きな行事が現在も続けられています。様々な立場の方がこの行事に思いをかけてこられました。私たちは実行委員会の一員として小学生への講話活動や、この行事の記憶を残していく活動をしています。



# 第1次能登震災・水害派遣

神戸大学ボランティアバスプロジェクトは2024年9月28日（土）～30日（月）の3日間、石川県輪島市へ派遣を行いました。学生3人は石川県の災害ボランティアに登録し、参加されたボランティアの方々とボランティアバスで現地に向かい、震災・水害からの復興支援を実施しました。

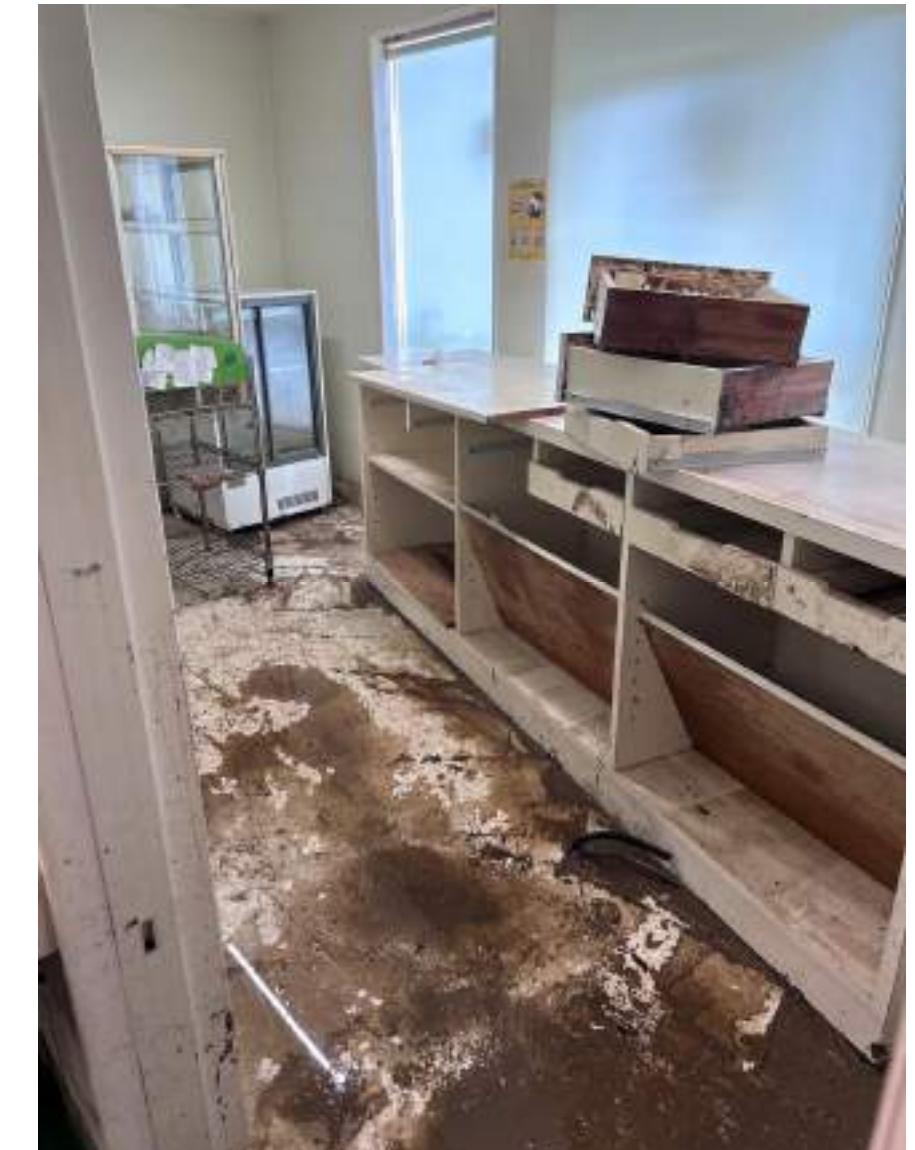
## 9月29日の活動

輪島市輪島、河井町での活動  
河川の氾濫による浸水被害  
床下の泥をかく  
→下水が混じった臭気、土ぼこり  
住宅の引っ越し手伝い  
弁当屋の冷蔵庫の整理、清掃  
→腐敗した食物、浸水被害  
・がれきの運搬、撤去



## 9月30日の活動

昨日に引き続き、弁当屋の清掃  
泥のかき出し、フライヤーの掃除  
調理器具類の泥落とし



# 令和7年 能登半島地震復興支援ボランティアの取り組み その1

## 1. 派遣概要

- 第3次能登派遣（4月4日～4月6日）
- 第4次能登派遣（6月21日～6月22日）
- 第5次能登派遣（10月17日～10月19日）



活動場所：石川県七尾市

受け入れ団体：おらっちゃん七尾

活動内容：引っ越し、解体予定家屋の家財運び出し・処分

## 3. 活動の様子



## 4. 参加者の声

### 初めての災害ボランティア

○能登半島地震復興ボランティアに興味を持ったきっかけ  
普段から災害についての意識はあったものの、自分自身の目で現場を見たことがなかった。実際に現地に訪れて現状を知るとともに、できることをお手伝いさせて頂きたいと思ったから。

○初めて活動してみて感じたこと  
災害は建物の倒壊といった物理的な被害をもたらすだけでなく、地域共同体の崩壊や過疎化といった社会的な影響を与えることを強く実感した。そこには求められるのは物資やインフラの支援だけではなく人との繋がりであり、だからこそ私たちが現地で活動することに大きな意義があると感じた。

○今後ボランティアとしてやりたいこと  
若くて体力のある今だからこそ、力仕事など人手が必要な支援活動に積極的に協力したい。それに加え、今後さまざまな経験を積み重ねることで、被災された方々の気持ちに寄り添い、人と人の繋がりを生むような文化的な支援を行えるようになります。

理学研究科 修士2回生 泉 啓太



### 未だに復興支援が必要な現実

○能登半島地震復興ボランティアに興味を持ったきっかけ  
当事者性の学習を進める中で、さまざまな社会問題に対して関心を持ち、ボランティア活動を行いたいという気持ちになりました。能登半島地震から1年半が経ち、ニュースで報道されるることは、今はほとんどありません。多くの人が、もう日常の生活に戻っていると思っているのではないでしょうか。私もその一人でした。しかし、今でも復興支援は続いている。実際に自分で地域の方の心情や震災による影響を感じたいと思い、参加に至りました。

○初めて活動してみて感じたこと  
震災から1年半が経過していますが、被害が比較的少なかった地域では、依然として手つかずの状態であることを今回のボランティア活動を通じて知りました。作業が終了し、帰路に就く際、家主から感謝の言葉をかけられ、微力ながらも復興に向けて一歩進むお手伝いができたと実感しました。今回の活動を通じて、被災された方々と共に復興していくという気持ちが、改めて強くなりました。

○今後ボランティアとしてやりたいこと  
復興支援を継続して行い、できるだけ早く被災者の負担が減るよう尽力いきたいです。



国際人間科学部  
1回生 東 菜

## 神戸大学ボランティアバスプロジェクト

### 2. 七尾市

人口: 45,695人

面積: 318.3km<sup>2</sup> (能登半島最大)



### 被害状況

震度6強

死者数63人

家屋の被害多数

市町村	申請棟数 A	完了棟数 B	公費解体数	別管理建物 C	解体率 B÷(A-C)
珠洲市	8,445	7,537	7,379	112	90.4%
輪島市	12,463	10,923	10,610	853	94.1%
能登町	4,497	3,735	3,553	24	83.5%
七尾市	7,135	4,611	4,083	456	69.0%
上記以外の市町村	11,472	10,117	9,279	365	91.1%
合計	44,012	36,923	35,004	1,810	87.5%

石川県 公費解体の進捗状況（令和7年9月末）より

### 災害と日常

第3次派遣は、公費解体が本格的に行われている時期に行いました。公費解体とは、令和6年能登半島地震及び令和6年奥能登豪雨により被災した建物を、申請に基づき市町が所有者に代わって解体・撤去する制度です。公費解体を行うためには、家財やお家の中のものを整理する必要があります。第3次派遣では、その整理のお手伝いを主にしました。

食器や服、日用品や雑誌など、日々使用するものの整理もしました。中には、お子さんのアルバムや賞状、家族で撮った写真などかけがえのない思い出が詰まっているものも整理しました。

日々の当たり前のことから、大切な思い出がお家にはありました。そこで思ったことは、日常を大切にしたいという思い、そして震災によって日常生活がなくなってしまうこともあるという言葉にしがたい思いです。

災害はいつ、どこで起こるか分かりません。神戸の街でも阪神・淡路大震災が起きましたし、私自身青森県で東日本大震災で被災しました。日々の備えをしつつ、こうした現実もあることを心に刻み、能登半島でできることをボランティアバスプロジェクトで行っていきたいと感じた派遣でした。

国際人間科学部子供教育学科 4回生 竹越智基

### 初めてのボランティア

#### ○災害ボランティアをしようと思ったきっかけ

私は元々ボランティアをしようと思ったわけではありません。機会があったらしようかなぐらいしか思っていませんでした。しかし、新学期に貰ったピラで1年半近く経った能登がまだ泥を搔き出したり、家財を運んだりしないといけないということを知りとても驚き自分も力になりたいと思いました。

#### ○初めてのボランティアを経て

行ってよかったですし、今後の取り組みにも参加しようと思いました。まず、行く前に思っていたよりも色々な事をしました。

今回は家財の運び出しやごみの分別が主な内容だったのですが、最後の方には掃き掃除をしたり家主さんのお話を傾聴したりと

元々考えていたより色々なできることがありました。

そして、ボランティアセンターでは絵はがきやAIの使い方を教えてもらっていました。他にも先輩は軽トラックのロープの結び方を教えてもらっていて、ボランティア活動を通して前向きな姿勢で

れば様々な貴重な経験を積んでいけることがわかりました。



理学部物理学科 1回生 黒木

# 能登半島災害ボランティア活動報告

神戸大学医学部医学科3年 Kobe Med Connect  
奥珠希 佐藤健生 島津里彩

神戸大学基金からのご支援による「神戸大学生による能登半島地震復旧・復興災害ボランティア活動経費助成」制度を用いて、能登半島災害ボランティアに参加しました。全2回の参加概要と各々の体験談や学びをここに報告します。

## 参加したボランティア

### ボラバス型災害ボランティア

石川県災害対策ボランティア本部が募集する、ボラバス型災害ボランティアに申込・参加しました。参加者は金沢駅に集合し、ボランティアする地域の拠点までバスで向かいます。

## 活動内容

- 被災した家屋の片付け
- 家財の仕分け
- 廃棄物の運搬 等



## 行程 1回目 参加者: 奥

4/3 夜行バスで  
神戸→金沢

能登町で家財運搬ボランティア

ベースキャンプ  
宿泊

4/4

能登町で家財運搬ボランティア

帰宅

## 2回目 参加者: 奥、佐藤、島津

7/5 夜行バスで  
大阪→金沢

佐藤  
奥  
島津

輪島市  
能登町柳田地区

帰宅

7/6

島津

柳田で家財運搬ボランティア

帰宅



それぞれの体験 それぞれのボランティア先での体験を通して、貴重な学びや気づきを得ることができ、考え方にも変化がありました。

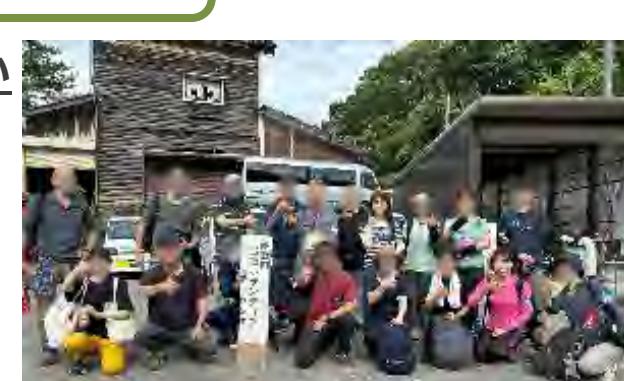
### 奥

主に4月に行った1回目の参加について

(4/3)

- 6:00 金沢駅到着・モーニング
- 8:45 金沢駅集合、バス出発
- 10:00 西山PA休憩、友達ができる
- 11:00 ベースキャンプ着、活動場所へ  
活動① 瓦の回収  
活動② 被災した住宅の片付け
- 15:30 活動終了、ベースキャンプへ
- 22:00 消灯

自分より体力・経験のある人が行った方が役に立つのでは…?という不安



いろんな人が集まったチーム。  
写真は7月のもの

### 赤ちゃんを連れたお母さんとの出会い

ボランティアの私たちに、何度も「すみません」と言う赤ちゃんを連れたお母さん。「かわいい赤ちゃんですね。」と声をかけると、それだけでこわばつた表情が柔らかくなつたように見えました。その顔が忘れられません。

### 参加後の変化

知識も経験も大した体力もない、頼りない自分でも、「そんな自分だからこそできることもあるのかもしれない」と考えるようになりました。あらゆる人が被災をしたのだから、あらゆる人が役に立てると気づきました。できる人が、できることを、できるときに関わることの大切さを感じました。

- 被災された方は老若男女・障がいの有無・国籍・出身地関係なく、「ただそこにいた人・住んでいた人」という当たり前のことの気づき
- 様々な得意分野・背景・属性の人が関わる大切さ

### ベースキャンプでの不思議な時間



- 廃校となった学校を利用して開設
- 教室・体育館に寝泊まり
- 理科室が談話室に
- 4月はまだ断水、トイレは仮設
- 夜はかなり冷え込んだので、ベンチコートやアルミシートが重宝しました。

プライベートテントには段ボールベッドとマットを用意していただきました

各自夕食を済ませたのち、ふらっと談話室になっている理科室へ。持ち寄ったお菓子を食べながら、「どこから来たの」「普段は何をしているの」「どうしてきたの」「ボランティアは初めて?」と話しました。会社員から高校生まで、なんと自分と同じ医学生もいました。これまで経験したことのない不思議な時間でした。

ボランティアに来ている人たちは、ここでしか会わない、話さない人たち。それでもそこには温かい空気が流れていきました。この不思議な時間は、私にとって大切なものになりました。

### まとめとメッセージ

- 被災者には様々な人がいるため、多様な属性の人がボランティアに行ったり、関心を持ったりすることが、より柔軟な支援に繋がる。
- 支援の方法、関わり方には多くの方法がある（実際に行く、募金する、ニュース見る、発信する、被災地のものを買う）。
- 9月に発生した水害を含め、被災地の“今”に关心を持ち続けたい。できる形で関わり続けたい。
- 災害に備えて、被害縮小のための対策だけではなく、地域の復興力をあげるための取り組みも必要だと感じた。

### 佐藤

- 6:00 金沢駅到着
- 6:35 金沢駅集合、バス出発
- 9:30 輪島市サテライト着
- 10:00 6つのグループに分かれ活動場所へ  
1件目: 荷物の納屋への移動、廃棄
- 12:30 午前の作業終了、お昼ご飯
- 13:30 お昼休憩終了、再度活動場所へ  
2件目: 屋根裏荷物の撤去
- 15:30 活動終了、サテライトへ
- 16:00 サテライト発
- 20:00 金沢駅着、解散



### ～グループでの活動～

あだ名をつけたり話題を振ったり、チームの会話を弾ませてくれたHさん  
時間管理も完璧でした

被災者の方とよくお話をされ、  
気配りがお上手だったMさん  
被災者の方も和んでいらっしゃいました

ボランティア19回目の  
超ベテラン！  
段取りや作業が迅速な  
「師匠」ことSさん

最年少！  
初参加で不慣れなが力仕事は得意な私

4人グループで2件を周りました。どちらも家の解体のために家財を運びました。

災害ボランティアって…  
がれきの撤去とか  
力仕事ばかり  
初心者が行って大丈夫？

- 災害ボランティアは荷物の運搬だけでなく、チームの作業、被災者の方との会話など多彩な要素がある
- 色々な人がいることでチームが向上しより良い活動になるのではないか

### ～素人ボランティアの限界～



朝市は大規模な火事  
により甚大な被害



横転する輪島塗りの会社の建物



道路は所々陥没や隆起をしていました

上の写真は、被災者の方の家に行く途中で撮影したものです。基本的に写真は控えるように言われていましたが、情報発信のためならと許可をいただきました。これらの復興は素人ボランティアの手に負えない案件です。いくら素人のボランティアが入っても、出来ることは倒壊の危険のない場所に赴き、手で荷物を運ぶことくらいであり、無力感を感じました。

また現地は金沢駅から遠く、ボラバス型のボランティアでは1日せいぜい4時間か5時間しか活動できません。

輪島市災害たすけあいセンターの方も、復興を大きく進めるには専門知識、技能を有した介入が必要だとおっしゃっていました。

直接現地で作業ができなくとも、資金援助などで専門的なボランティアの支援をすることも大事だと思いました。ボランティアの方法は1つだけではなく、被災地の刻々と変化する状況によっても需要が変わります。今回の経験は、様々な角度からのボランティアについて考えるきっかけになりました。

### 島津

1日目 7/5

- 5:45 夜行バスで金沢駅到着
- 6:20 金沢駅集合、バス出発
- 9:30 能登町柳田地区到着  
被災した住宅の荷物運び出し
- 12:00 昼食休憩
- 15:30 活動終了、金沢駅へ
- 16:30 ベースキャンプ到着
- 20:00 宇出津あばれ祭に連れて行ってもらう

家の解体のためには、家財を運び出して各自で処分する必要があります。その家財運搬や処分のお手伝いをさせていただきました。由緒あるお家に入らせてもらったり、活動の合間に家主の方からその家の歴史をお聞きしたりすることもできました。



輪島ベースキャンプ  
キャンプはボランティアや融資の方によって運営され、備品は支援物資で成り立っていました。教室内の簡易テントと簡易ベッドで宿泊させていただきました。



宇出津あばれ祭  
宿泊日が偶然あばれ祭の日だったので、祭に参加させていただくことができました。県外に避難されている方もこの日は能登に戻り、切子を担がれていました。

### 参加前

ボランティアに批判的な報道や意見を見聞きしていたことで、災害援助の経験や専門知識がないと、派遣先で迷惑がられるのではないか、役に立つことはあるのだろうか、と不安や迷いがありました。

### 活動中

被災地には、全国各地からボランティアの方、物資、支援金が集まっています。どの形の支援も必要とされていました。

お金はあっても、物が売っていない  
今は寄付金よりも物資がほしい

ベースキャンプの運営者さん

実際に人に来てもらう支援  
が一番ありがたい

ボランティア先の家主さん

### 参加後

物資支援、人的支援、金銭的支援はどれも生活を取り戻すために必要だと気付きました。そして、人や場所、また災害からの時間経過や被害規模によって、同時多発的に多様な支援が求められていることを知りました。このことから、どの支援も必要であるため、各々ができる支援をし、それを批判せずたえ合える人でいたいと思うようになりました。

もの ひと お金

すべて必要で、  
バランスが大事

被災経験のある人、知り合いを亡くした人、耳の聞こえない人、各地のボランティアに参加している人etc...。活動中、多様なバックグラウンドのボランティアさんと出会い、お話をできました。一期一会の、地域を超えたつながりを尊び、ボランティア同士でも助け合う雰囲気の中で、貴重な体験をさせていただきました。

